

## 良い文章って何??

井上 雅彦(本学教職研究科教授 国語教育学)

新型コロナ感染拡大を受けて、5月に外出自粛要請が出された。田舎で一人暮らしの母も、この機会にと断捨離を始めたようである。私が帰郷した時、「こんなものが出てきた」と黄ばんだ7冊の古いノートを持ち出した。そこには小学校1年生9月から小学校3年生の9月までの生活記録が記されていた。例えば、次のようなものである。

きょうは さんかんびがありました。おかあさんがみたら (みられたら) なんやしらんけど (なんだかしらんけど) なみだがでました。ましてはでて 2じかんめになるとやととまりました。

※( )は方言を共通語に変えた

これに対して「どうしてなみだが出たのかな。おかあさんがおべんきょうをみてくださったのでうれしかったのかな。」と赤で先生の評語が入っている。

他の文章も「きょうは～しました。～思いました。」という形で日常の出来事を思ったまま、感じたまま文章に綴っている。2年間で文章力の向上がどの程度みられるのか隈無く読んでみたが、仮名遣いが習得できた程度で、書きことばと話しことばの区別も覚束なく、文章力の向上はほとんどみられない。

ちょうど同じ日、ある新聞の投稿欄に小学校2年生の文章が投稿されていた。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急経済対策として、政府は一律10万円を支給したが、それに対する文章である。

国が国民に10万円はらうとはっぴょうしました。でもぼくは反対です。なぜかという、困っている人だけにわたしたほうがいいと思うからです。

たとえば、でん車、いんしょく店、スポーツせん手など、売り上げが下がったり、そもそも仕事ができない人がいます。その人たちが困っているのはだれのせいでもなく、本人たちのせいでもないので。〈中略〉



だから、ゆとりのある人は、困っている人に10万円をわたせばいいと思います。とくに、なるべく自分のみぢかな人にきふしたらいいと思います。

そして、コロナがおわって、そとに出られるようになったら、きふしたお店に行って売り上げにこうけんしたらいいと思います。

こちらは、身の回りの経験や関心ではなく、社会生活の中から課題を見つけて、自分の意見を明確に記している。そして、根拠を示しつつ意見が効果的に伝わるように段落意識をもって書かれている。具体例も挙げられ、現在と未来の時間意識もある。前者は1年生9月の文章、後者は2年生はじめの文章であるから半年の発達段階の差はあるが、書く技術に格段の違いがあることは確かである。

読者の皆さんは、この2つの文章のどちらの文章を良いと思われだろうか？ もちろん後の文章の方が、様々な技術を用いながら理路整然と自分の意見を読み手に伝えるように書いているので、上手だと思われるだろう。しかし、飾って書く意識など少しも感じられず、自分の経験を受容性豊かに子供らしく素直に綴っている前の文章は劣った文章なのだろうか。

実は二つの文章の違いは、子どもが受けた作文教育の違いが、少なからず影響していると思われるのである。前の文章は昭和40年頃に書かれている。当時は学習指導要領に即して文章表現能力の育成に重点を置くいわゆる国語科作文派と、「ありのままのこと」を「ありのままに」「くわしく」書くなかで現実認識

を育てようとする生活綴り方派の間で展開した「作文・生活綴り方教育論争」の影響が残っていた。私の故郷では、生活綴り方の実践が行われていたようである。

作文教育の目標を、達意の文章を書くことに置くのか、子どもの世界観の基礎をつくることとするのかによって、このように違いがでることを「我が事」として実感した里帰りになった。

幼少期の稚拙な文章に対する言い訳である。

